

# 豊かな人間性を培う家庭教育の推進

## －親子アンケートを基にした家庭教育支援－

樺原市立畝傍中学校 教諭 山 野 薫  
Yamano Kaoru

### 要 旨

急激な少子化・高齢化の進行、地域の結び付きの弱まりにより、家族や家庭の有り様が大きく変化するとともに、子育てに悩みをもつ保護者が増えている。また、思春期の子どもとの接し方に戸惑う保護者も少なくない。このような状況を踏まえ、学校と家庭がどのように連携していくべきかを、家庭教育の推進という観点から考察する。

キーワード： 保護者への支援、学校と家庭の連携、子どもの自立

### 1 はじめに

今年度4月、私は1年生担任になり、とても新鮮な気持ちでクラスの子どもたちと出会った。定例の家庭訪問が過ぎ5月の宿泊訓練が終わったところから、子ども一人一人がよく見えてくるとともにそれぞれの家庭の様子が少しずつ分かってきた。そんな中、思春期の子どもとどう向き合えばよいか戸惑い、模索している保護者からの相談を受けた。それ以降も、家庭内の問題や保護者の悩みを聞き、ともに考えた件数が今までになく多くあった。確実に、家庭からの相談ごとが増えてきている。多発する少年犯罪が大きな社会問題になるとともに、子どもたちが犠牲になる犯罪が後を絶たない今、家庭と学校の相互の連携がより一層必要となる。そこで、子どもたちの豊かな人間性を培い、よりよい成長を支えるために、学校と家庭がどのように連携していけばよいかを研究する。

### 2 研究目的

各家庭には、それぞれの保護者の教育方針があり、家庭教育に対する考え方にも違いがある。そんな家庭における教育を、私たち教員がどんな形で支援していけるのかを考え、子どもたちが健全で希望にあふれる生活を築くための手助けをする。現在の中学生の生活実態をとらえ、保護者自身の生活や意識と照らし合わせて、彼らの健やかな成長のために学校と家庭がどのように連携していけばよいかを考察する。

### 3 研究方法

- (1) 学校生活とつながる家庭教育とその支援
- (2) 親子アンケート実施・分析に基づいた家庭教育支援
- (3) 道徳の授業実践から考える家庭教育支援

### 4 研究内容

- (1) 学校生活とつながる家庭教育とその支援

学校の中では、子どもたちを巡って毎日様々なことが起こっている。遅刻や忘れ物、口げんか、校内での事故もあれば、いじめ・暴力に至る大きなトラブルまで様々である。学校で子どもたちにかかわって起こったことは、どんな些細なことでもその日のうちに電話や家庭訪問等を通じて家庭に連絡する。本校では年間2回三者懇談を行う。更に学級懇談も年に2回行っている。これらの懇談も保護者の声を聞くことのできる貴重な機会である。また、本校では、学級経営の一環として『班ノート』活動に取り組んでいる。集団づくりの核に班活動を据えるという学校教育方針の下、クラス内の生活班のメンバーで毎日ノートを回して書いていく。班員がお互いを理解するとともに教員が子どもを知る材料として、『班ノート』は大いに活躍している。

このような日々子どもや保護者とのかかわりの中で、家庭の様子が見えてきたり、保護者の思いが感じられたりすることが度々あった。それを受けて、どのように保護者や家庭を支援できるだろうかと考えた。その具体例を以下に紹介する。

#### ア 『班ノート』から家族像とその課題が見える例

##### 男子生徒Aによる班ノートの一部

お父さんは最近カレーとか作ってお母さんの手伝いをしています。やっぱり家族は、みんなで助け合ったり協力したりするのが家族だと思います。ぼくは、たまにご飯をたいたり、洗濯物を干したり取りこんだりなど家の手伝いをしています。みなさんは家の手伝いをしていますか？たまには家の手伝いをしていると気分がすっきりしたり、悩みごとが解決したりしますよ。

みなさんも家の手伝いをして毎日働いている親の手助けをしてみたいかですか。意外と親やもちろん自分もうれしくなりますよ。思いやりってやっぱり大切なことですね。

みなさんは班ノートをお父さんやお母さん、おばあちゃんやおじいちゃんに見せていますか？ぼくはお父さんとお母さんに見せてあげています。いつも班ノートがぼくに回ってきたらお父さんが見せて見せてと喜びながら言ってきます。ぼくの書いたことや他の人が書いたのを見ます。

Aの班ノートは家族についての記述がとても多い。彼は、生真面目であるが、クラスの仲間とコミュニケーションをとるのがあまり上手でない。家族の結びつきの強さが感じられる反面、思春期を迎えながら親離れできない彼の自立について保護者と共に考えることの必要性を感じる。

#### イ 保護者からの直接の相談に対する対応例

Bは、硬式野球のクラブチームに所属する男子生徒である。勉強が好きではなく根気が続かない。道徳の授業での作文に「高校へ行くために勉強するんだと親は言うけど、ぼくは勉強なんかしなくても何とかかなと思う。」と書いている。初めての中間テストの結果がふるわなかったため、期末テスト前、母親はBに付きっきりで勉強させたが、反抗的なBの態度にどうしていいかわからなくなり、困り果てて学校に電話をしてきた。それ以降比較的頻繁に母親と連絡を取り合っていたが、冬休みの最終日、初めてBの父親から電話があった。「冬休みの宿題なんか真面目にやらなくていいんだ。」と開き直ってしまったBに関する相談だった。反抗期真っ只中の彼は、母親の言うことは一切聞き入れず、父親が登場したようである。できる限り学習の習慣付けができるよう家庭でもBを見守ってもらい、担任としても、きちんと宿題をやりきることができるようBを指導することを約束した。このケースは、親子間で、子どもに学習の習慣を身に付けさせたいという保護者の願いと、子ども自身の学習動機の未熟さが、互いに理解できていない例である。担任としては、情報交換による保護者への支援に加えて、子どもに対する学習の動機付けを行う必要がある。また、「宿題をきちんとやりきる」ということは、「決められた約束ごとを果たす」ということにも通じる。宿題指導を通して、Bの社会性も高めていく必要がある。

## ウ 三者懇談での相談に対する対応例

小学校高学年から中学校1、2年あたりが、女子生徒の人間関係が難しい時期ではないだろうか。そのことを、娘をもつ保護者も痛感していることが多い。

クラスの副級長をしているCは、小学校のころから女子同士の人間関係に悩んできた経験を持ち、親子ともにこのことに過敏傾向にあった。1学期の三者懇談のとき、真っ先に「先生は、この子をどう感じているか。」と母親から問われた。Cが、正しい判断力を持ち周囲に対して配慮のできる点を評価した上で、周囲の目を気にするあまり自分を抑えてしまう場合があることを伝え、率直に自分を出していくことの大切さを伝えた。2学期は行事が多くクラスとして活動する場面がたくさんあり、Cにとっても難しい局面が多かった。本人から、教室で暗くなるまで愚痴を聞いたこともあったが、担任として、まず彼女の思いを受け止め、その上でアドバイスすることに努めた。学期が進むにつれて、Cの態度にも落ち着きと自信が見られるようになった。

学期末の三者懇談では、母親から「娘は家でも友人関係の悩みを口にしていたが、先生のアドバイスを踏まえ、娘の話はきちんと聞いた上で、後は親が口を出しすぎず本人を見守ってやるよう努めた。」という言葉が聞かれた。このケースは、子どもの成長に向けて保護者と教員が足並みをそろえて対応できた例と言える。

## エ まとめ

保護者は、学習をはじめ人間関係等、学校での子どもの様子が分からず心配していることが多い。また、学校での様子についての不十分な理解による子どもとの対応が、親子間のきしみを招くこともある。教員のなすべきことは、①子ども本人をよく見つめ、理解に努める。②学校での子どもの姿を保護者に伝える。③どんなことに悩んでいるのか、どんな子どもに育ててほしいのか、保護者の悩みや願いを吸い上げる。④子どもと保護者の仲立ちとなり、相互理解の促進に努める。ということだろう。それが、子どもの自立に向けた保護者との連携につながると考える。

## (2) 親子アンケート実施・分析に基づいた家庭教育支援

### ア 親子アンケート実施のねらい

思春期の子どもたちは、保護者に向けて素直に気持ちを伝えることがなかなかできない。彼らの思いに寄り添い、成長の手助けをするためには、この時期の子ども素直な思いを探ることが不可欠になってくる。その手段としてアンケート調査が適切であると考えた。さらに保護者に向けてのアンケートは、保護者自身が子どもへの接し方や思いを振り返り、よりよい親子関係・家庭の在り方を模索する機会として意義があると考えた。保護者の思い、子どもの思いをお互いに客観的に知ることができたら、アンケートの果たす役割は大きなものになるだろう。また、保護者がアンケートの結果を見ることで他の保護者の思いを知ることができ、勇気付けられたり安心できたりと、その後の家庭教育へのエネルギーになっていくに違いない。このようなことを踏まえて親子アンケートを実施した。

### イ 概要

子ども向けアンケートは、学活の時間に一斉に行った。後に担任用資料としても活用できるように記名で行った。保護者向けアンケートは、依頼文とともに子どもに持って帰らせ、再度担任が回収した。保護者については無記名で行った。

1年6組	男子18名	女子17名	計35名	回収数	33名(当日欠席2名)	回収率	94%
同	保護者		計35名	回収数	30名(母親の回答29)	回収率	86%

### ウ アンケート結果と事例考察

(子ども向けアンケート・保護者向けアンケートおよび回答集約 別添資料1)

近年、『食育』という言葉がよく聞かれるが、やはり家庭というものを“食”なしで語ることはできない。子ども向けの《生活に関するアンケート》に、まず“食”に関する項目を入れた。

①「朝食を食べていますか」、②「主に食べているものは何ですか」、③「家族そろって夕食を食べていますか」という質問である。①では朝食を摂っていない子どもは33名中4名であり、理由は、「朝起きるのが遅くて食べられない」「食欲がない」というものである。朝食を食べていない割合は比較的低いが、食べていない子どもも少数ながらいるので、朝食の大切さを考える時間をもつ必要があると考えている。③については、「家族そろって夕食を食べることがない」という子どもが7名いる。

表1 アンケート結果(子ども)

	①朝食	③夕食
1.いつも食べる	20名	6名
2.だいたい食べる	9名	30名
3.食べていない	4名	7名

「父親が単身赴任している」「父親の帰宅時間が遅い」という理由と並んで、「塾や習いごとで家族がそろえない」という理由が挙がっている。塾や習いごとは、本人にとって決してマイナスのものではないが、このことで家族が集う時間が少なくなっている実態がある。

③に関連して、クラスのDについて述べる。Dは、活発さと落ち着きのなさが併存することにおいて、クラスの中でひととき目立つ存在の男子である。Dの家庭では、父親だけが別に夕食を摂る。父親の帰宅時間が遅いわけではなく、同じ時間帯に意識的に違う場所で食事をする。これは、Dと父親の関係がよくないことが理由である。彼が小学校高学年になったころから父親とのかわりが極めて希薄になってしまったらしい。一方、学校での様子に目を転じると、Dは常に自分の思いを主張したがる。「僕のことを見て」「僕の話聞いて」と言わんばかりに授業中も教員に向かっていろいろなことをよくしゃべる。家庭環境においてDの抱える問題が、学校での言動に大きく影響していると思われる。Dの実態がアンケート実施によって、より浮き彫りになった。この問題については、特に母親と連携していく必要がある。家庭内において、父親とDの仲介役を果たせるよう、連絡を密接にとり、母親を支援していきたい。

アンケートには記述形式の質問も入れた。家族に寄りかかりたい反面、干渉されることを嫌う思春期特有の複雑な心の内がうかがえる回答がある一方で、家族を、かけがえのない存在・宝物とする回答も多数あった。(別添資料1参照)

表2 アンケート結果(保護者)

次に保護者向けアンケート結果について

考察

家庭教育において大事にしていることは何ですか	
1位	人に迷惑をかけない
2位	思いやりの心をもつ
3位	生活習慣を身に付ける
4位	うそをつかない

する。特徴的な回答例を左表に挙げた。

「家庭教育(しつけ)において大事にしていることは何ですか」の回答の1位に挙げたのは「人に迷惑をかけない」、2位は「思いやりの心をもつこと」であった。

多くの保護者が「人と人のかかわりの中で生きている」ということを大事に考えていることが分かる。また、興味深いのは、「子どもの教育やしつけの役割分担」についての回答だ。「どうあるべきだと考えていますか」と「実際どうなっていますか」の回答にはいくらかずれがある。「日常的なしつけ」「家庭学習への助言」など6項目について質問したが、どの項目においても“父親と母親で”の回答数が多かったのは、「どうあるべきだと考えていますか」に対する答えであった。

「家庭教育は父、母の両方で共にやるべきだ」と多くの保護者が考えているが、現実には理想通り

ではない。しかし、場面によって、両者の特性を生かした役割分担がよい結果を生むこともあるはずである。

## エ まとめ

予想以上に多くの保護者からの丁寧かつ率直な回答を得ることができ、心のこもったコメントに考えさせられることが多くあった。(別添資料1参照) 家庭での教育問題については保護者自身が自分だけで抱え込んでしまうことが多く、第三者の意見を聞いたりそれぞれの思いを交流したりする機会はとても少ない。そこで、子どもに保護者向けアンケート結果を家庭へ持ち帰らせ、保護者に見てもらったところ、次のコメントが寄せられた。

アンケートの結果を見て、同年代の子どもをもつ親の思いや望み、また悩みや不安が同じような内容で、同じような思いで子育てをしていることが分かりホッとしたような安心したような思いになりました。いろいろな意見や考え方、方法を参考にし、これからも子どもと向き合いながら子どもの目標実現に協力していきたいと思いました。アンケートの結果を頂いたことは他の方々の思いを知るよい機会になり、よいことだと思います。子どもたちが悩む時期＝親の悩む時期だと思います。今後もこのような機会があればと思います。子どもと一緒に成長できたらと思います。

アンケートを通して、保護者一人一人が他の保護者の思いや家庭教育への姿勢を知ることができた。このことが、悩み、模索しているのは決して自分だけではないという安心と、悩みながらもこのまま歩んでいけばいいんだという明日への希望につながることを期待される。

また、子どもは思春期特有の揺れをもちながらも心の底では家族を大事に思い、保護者は思いやりを大切にしたい両親協同での子育てを理想としているということが今回のアンケートから分かった。学校が両者の架け橋となることが、求められる家庭教育支援の一つであろう。

## (3) 道徳の授業実践から考える家庭教育支援

### ア 授業実践のねらい

学校では、集団生活にかかわって、ルールを守ることや仲間を大事にすることが生徒指導の中心になっているのが現実である。思春期の子どもたちが、自分自身の心とからだの成長について立ち止まって考えたり、自分と家族とのかかわりを振り返ったりするような時間は、3年間を通してみてもわずかである。しかし、人生の中でも大きく変化する時期の中学生の子どもたちにとって、このような学習や自分を見つめる営みはとても大切だと考える。そして、それは、正しい判断ができ、人を大事にできる人間の育成につながると思われる。そこで、道徳の時間に『自分の心の成長を見つめる』授業を実施した。

### イ 展開と考察

《生活に関するアンケート》実施の後、12月に入って道徳の授業を行った。(別添資料2参照) 誕生してから成人するまでにどんな成長過程があり、自分たちは今どんな位置にいるのかを考え、現在の自分を見つめる時間をもつことをねらいとした。また、“反抗期”や“自立”ということについても生徒たちに問いかけてみたところ、ほとんどの生徒が、自分は今、反抗期だと思いと認識していた。そこで、中学校道徳テキスト『あすを生きる』の中の「わたしの反抗期」「お父さんお母さん」という教材を用い、自分の家庭での行動や家族との接し方、家族への思いを考え、作文を書くという展開を試みた。

アンケートと同様、授業で取り組ませた作文にも、生徒たちが家族や家庭を大切に思う気持ちが読み取れる。しかし、その思いを素直に表せなかったり、その気持ちとは裏腹に家族をうっとうしく思う自分にジレンマを感じたり、悩んだりしている姿もうかがえる。おそらく、「家族が大好き！」と作文の中で気持ちをストレートに表している生徒は、人の気持ちの分かる優しい大人

に成長していくだろう。今回はこの作文を保護者に見せることはできなかったが、いろいろな機会をとらえて生徒たちの「心の成長」を保護者たちに伝えていきたいと思う。

この授業の後編として、『親の思いを知る』授業を行った。《保護者向けアンケート》の結果を見て、生徒たちがどんな反応をするのか知るためである。「将来、子どもがどのような人間に育ってほしいと考えていますか」「今までの子育ての中でうれしかったことはどんなことですか」という二つの質問の回答を見て感じる事・考えたことなどを書かせた。生徒たちは、大いに保護者の

表3 授業の反応

うれしかった・意外に思った・期待に応えたい
感謝しないとあかん・産んでくれた命を大切に
親にもいろいろな願いがあるんだな

の回答に興味を示した。家族が一番身近な存在である。だからこそ親も子も照れくさくて素直に言えない思いがたくさんある。その一端を知ることにより、家族を見つめ、更には自分を見つめ直す機会となった。

## 5 研究結果と考察

今回実施した子ども向けアンケート回答にも、道徳の授業中の反応にも、彼らの家庭・家族の有様を反映したものがたくさんあった。日ごろの言動をはじめ、物事の考え方に至るまで、子どもたち一人一人の人格を形成していく基盤は家庭にあり、すべての教育の出発点は家庭であるという思いを更に強くした。一方、保護者向けアンケートには「親の願い」があふれていた。子どもの健全やかな成長は、保護者共通の願いである。そのような願いに応える一方策として、双方の思いを伝え合う仲立ちはもちろんのこと、思春期に代表される揺れ動く時期の子どもたちと向き合う具体的な手だてが分からない保護者に適切な情報を伝えていくことも教員の大きな役割である。学校は保護者との連携という立脚点から、家庭教育を支援する態勢づくりを更に強化していくことが大切だと考える。

## 6 おわりに

先日、今年度最後の授業参観と学級懇談を行った。懇談では、保護者間の交流を図ってもらうことをねらいとし、子ども向けアンケートの結果について紹介した。参加者からは、共感の声とともに、「中学生になって急に行動範囲や交際範囲が広がり、保護者には把握できないことがたくさん出てきた。だからこそ、保護者同士で情報交換ができたり、困ったとき助け合えるネットワークがほしい。」という意見が出た。まさに学校と家庭の連携に加えて、各家庭同士の連携の必要性が提示されたのである。学校・教員が、直接保護者を支援するとともに、学校そのものが保護者同士でつながることのできる場としての機能をもつことが大切だ。更に、家庭教育の重要性に対する意識の高まりを、一人でも多くの保護者に広げるための手だての工夫をしていく必要があると考える。そのような営みが子どもの健全な成長を支え、ひいては自立を促すことになるだろう。これからも子どもたちの心を大事にしながら、根気強く家庭教育支援の取組を続けていきたい。

## 参考文献

- |              |                      |          |      |
|--------------|----------------------|----------|------|
| (1) 思春期を生きる力 | 石田一宏                 | 大月書店     | 1999 |
| (2) 思春期のこころ  | 清水将之                 | 日本放送出版協会 | 1996 |
| (3) 思春期とは    | 江幡玲子                 | 小学館      | 1986 |
| (4) 県立教育研究所  | 平成12年度家庭教育アンケート調査報告書 | 奈良県教育委員会 | 2001 |
| (5) 県立教育研究所  | 平成13年度家庭教育アンケート調査報告書 | 奈良県教育委員会 | 2002 |